初期「北部九州の古代史」

佃　収

はじめに

「北部九州の古代史」については文献や遺跡の発掘があり、それなりに解明されている。しかし、それらは「その点」の時代についての解明である。

「歴史」は「時間の流れ」である。「時間の流れ（歴史）」に沿って「北部九州の古代史」を究明した研究はほとんど無いと言える。

今年（２０１６年）、某大学の公開講座の講演依頼を受けて、「北部九州の古代史」について、「歴史（時間の流れ）」として講演をした。本論はその「講演資料」である。題名は変更してある。

一　「日本の歴史」のはじまり　（「天孫降臨」）

（一）　呉の倭人

○呉の倭人の朝貢

■周時、天下太平。越裳獻白雉、倭人貢鬯草。

『論衡』「儒増篇」

（訳）周の時、天下は太平。越裳は白雉を献じ、倭人は鬯草（ちょうそう）を貢ぐ。

■成王之時、越裳獻雉、倭人貢暢。

『論衡』「恢国篇」

（訳）成王の時、越裳は雉を献じ、倭人は暢（ちょう）を貢ぐ。

成王の在位　「紀元前1115年～1079年」

□「紀元前1200年～10000年」ころの「倭人」は呉地方に居た。

日本列島は「縄文時代」である。日本列島には「倭人」は未だ居ない。

（二）　「天氏（安冕辰沄氏）」の「渤海沿岸渡来ルート」（佃説）

「倭人」の「天氏（安冕辰沄氏）」は朝鮮半島南部に「高天原」を建国する。

■「天氏」は呉地方から山東省（臨淄）へ行き、渤海沿岸をまわり、朝鮮半島へ。

■「紀元前200年」ころ、「天氏」は韓国泗川に「高天原」を建国（図1）。

図1　天氏の渤海沿岸ルート

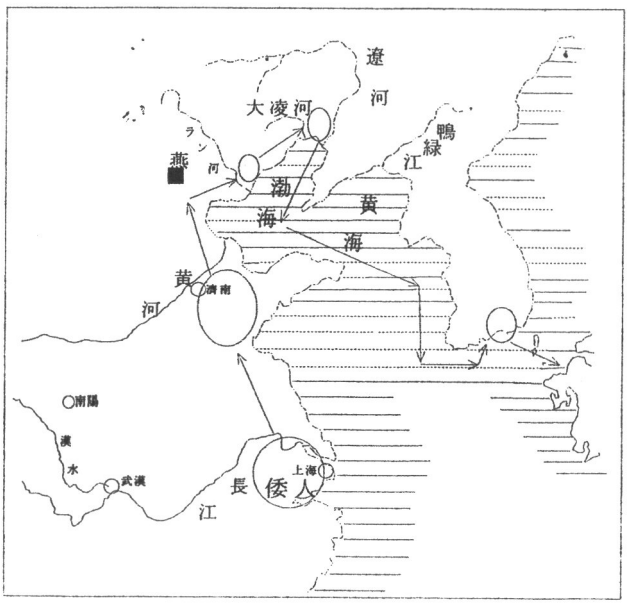
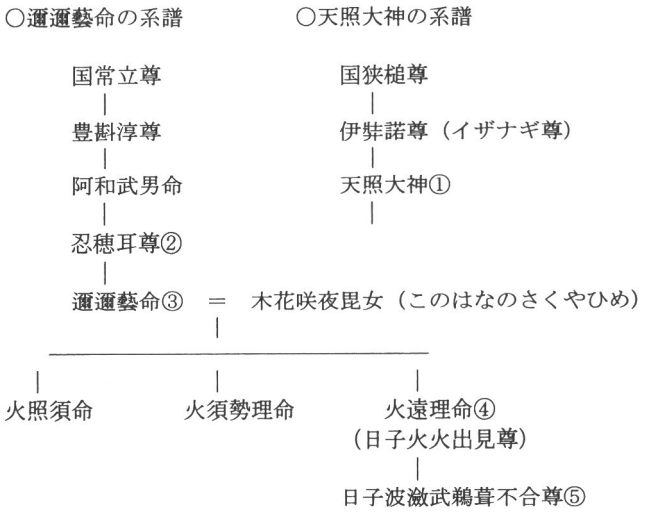


図1　天氏の渤海沿岸移動ルート

（三）「高天原」の時代と「豊阿始原の世五代」

「高天原」時代

図2　高天原時代の系図



（注）番号は「豊阿始原世五代」（『宮下文書』より）

図2　高天原時代の系図

藝命」である。

高木神の女（娘）に御合いして生まれた子、天火明命。次に邇邇藝命。二柱なり。　『古事記』

天火明命（天照国照彦天火明尊）は北九州に「天孫降臨」する。

天照大神は正哉吾勝勝速日天押穂耳尊を天降りさせようとしたとき正哉吾勝勝速日天押穂耳尊に天照国照彦天火明（櫛玉饒速日）尊が生まれる。そこで天照国照彦天火明（櫛玉饒速日）尊を降臨させる。

『先代旧事本紀』（天神本紀）概要

（注）「天火明命」の「（櫛玉饒速日）」は誤りである（「古代文化を考える」63号）。

○最初に邇邇藝命の兄「天火明命」が「北九州」に「天孫降臨」する。

■「天火明命」の子孫が福岡県宗像市を本拠地にする「天武天皇」。

（四）天火明命の「天孫降臨」

「天火明命」は天之忍穂耳尊の長子であり、弟は「邇邇

（五）火照須命・火須勢理命の「天孫降臨」

火照須命・火須勢理命は附地見島（筑紫）に天孫降臨する。

今や、天つ神・国つ神・八百萬神の決議に基づき、将に神都を附地見島に遷さむとし給う。（中略）則ち、軍勢を二手に分ち、附地見島、東の水門より攻むる大将は、元帥火照須命、副帥武甕槌命・稚武王命、軍勢五萬餘神とし、他の一軍は、附地見島、南の水門より攻むる大将は、元帥火須勢理命、副帥経津主命・建御名方命、軍勢五萬餘神とす。

『宮下文書』

○附地見島（筑紫）の征伐隊

■東軍（五萬餘）…「附地見島（筑紫）」の東の水門（博多湾）

■南軍（五萬餘）…「附地見島（筑紫）」の南の水門（有明海）

（六）神皇「日子波瀲（なぎさ）武鵜葺不合尊」の「天孫降臨」

附地見島を征伐して神皇「日子波瀲武鵜葺不合尊」が「天孫降臨」する。

乃ち神皇は、左右大神初め、天つ神・国つ神の諸役神を支り加えて、高天原より附地見島の新宮に天降りましまし給う。（中略）而して其の新に都を築きしに因り、附地見島を筑市（ちくし）島（後世、作筑紫）と改め給ひ、其御舟の初めて着きましし水門を津久始（つくし）初古崎（はこさき）とそ名つけける。

『宮下文書』

○箱崎に上陸して博多湾沿岸に「天氏」の「都」を築く。

（七）「天孫降臨」とは

○「紀元前140年～120年」ころ、「天氏」は「高天原」から北部九州に移る。

■西北大陸（衛氏朝鮮）から度々侵攻があり、「高天原」から北部九州に逃げる。

■「高天原」から「北部九州」への逃亡が「天孫降臨」である。

（詳細は33号（『新「日本の古代史」（上）』（佃収、星雲社））

（ホームページに「全論文」を公開）

（八）「天孫降臨」の遺跡（1）

○「火照須命」は「東の水門（博多湾）」より攻める。

…吉武高木遺跡、他

後に、前原市へ移り、「伊都国王朝」を樹立する。

○「火須勢理命」は「南の水門（有明海）」より攻める。

…吉野ヶ里遺跡、他

（九）「天孫降臨」の遺跡（2）

「天孫降臨」による新しい「都」＝須玖岡本遺跡（福岡県春日市）

「天孫降臨」により「弥生時代中期」が始まる。

春日丘陵とその周辺では弥生時代前期については、小規模な遺跡が散在する程度で、局所的な生活の痕跡しか残されていない。

ところが弥生時代中期の前葉以降、突如として集落数が増加するとともに、須玖岡本遺跡をはじめ多数の甕棺墓群が形成されるようになり、広範囲におよぶ集団の領域が形づくられるのである。

そしてこの領域の設定については、遺跡の状況からみるかぎり、他地域から移動してきた集団によって計画的に行われたものと想定される。

『須玖岡本遺跡』（吉川弘文館）

○「他地域から移動してきた集団」とある。

■まさに「天孫降臨」の遺跡である。

■「領域の設定は計画的に行われた」とある。新しい「都」を企画して造っている。

（一〇）「天孫降臨」の時に渡来した人数

『宮下文書』は「東軍（五萬餘）」、「南軍（五萬餘）」と記す。「計10萬人」が「天孫降臨」の時に「朝鮮半島」から渡来している。

『考古学・人類学・言語学との対話』（岩波書店）の中で人類学者の馬場悠男氏は次のように述べている。

人間のほうは少なくとも千あるいは万単位の人たちが来たであろう。つまりそれまでは日本列島には縄文人しかいなかったわけですが、弥生時代になって人が急に増えた。どこからやって来たかといったら、それは中国と朝鮮半島からやって来たとしか考えられないわけですね。

馬場悠男氏

「弥生時代」に「中国」や「朝鮮半島」から「千単位」、あるいは「万単位」の人々が渡来したと言う。

「弥生前期」は「小規模な遺跡が散在する程度」であり、「弥生時代中期の前葉以降、突如として集落数が増加する」という（前述）。馬場悠男氏の言う「弥生時代」とは「弥生時代中期前葉」である。まさに「天孫降臨」である。

□「日本の歴史」の始まり（まとめ）

■「弥生時代前期」は「小規模な遺跡が散在する程度」である。

■「弥生時代中期前葉（前１４０年ころ）」に朝鮮半島から「万単位」の人々が渡来する。「天孫降臨」

である。

■「天氏」により、「銅鏡・青銅利器」や「甕棺墓」が北部九州にもたらされる。

■「弥生人（天氏）」はやがて瀬戸内海から近畿地方、関東へと広がる。

■「天氏」は「日本人」の基盤になっている。

■「縄文人」や「弥生時代前期の人々」は「天氏」に吸収されている。

■「天氏」は「日本語」である。「伊都国王朝」と「卑奴母離（ヒナモリ）」

■「天氏」は日本列島に「日本語」をもたらした。

■「天氏」の「天孫降臨」は「日本の歴史」の始まりである。

■『古事記』『日本書紀』も「日本列島の歴史の始まり」を「天孫降臨」としている。

二　卑弥氏と「倭城」

（一）「卑弥氏」も倭人

「倭人」には主に「二つの氏族」がある。

■天氏（安冕辰沄氏）　海幸彦・山幸彦

■卑弥氏（貢彌辰沄氏）　狗古智卑狗（彦）・大彦

■「倭人」は「大人（たいじん）」を「彦」と称している。

■「倭人」は「日本語」である。

（二）「卑弥氏」も呉地方から渡来

『新撰姓氏録』に、「松野連」は「呉王夫差」の後裔とある。

松野連
出自呉王夫差也。　『新撰姓氏録』右京諸蕃
（訳）呉王夫差より出るなり。

「松野連系図」も「呉王夫差」から始まる。

■「松野連系図」には「松野連」は「卑弥氏」であると明記（65号（2））。

□「卑弥氏」も「天氏」も、「呉」地方に居た「倭人」である。

（三）呉地方から北上

「倭人（天氏・卑弥氏）」は「紀元前１２００年」ころは呉地方に居た。

■「前５０５年」に「呉越の戦い」がはじまる。

■「前４７３年」に呉王夫差は越王句践に伐たれて自殺し、呉は滅びる。

■「呉」地方に居た「倭人」は越に追われて北へ逃げる。

（四）黄河下流域の「卑弥氏」

「卑弥氏（貰彌辰沄氏）」は呉地方から黄河下流域に来る。

蓋国在鉅燕南倭北倭属燕　　『山海経』海内北経

（訳）蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り。倭は燕に属す。

○「鉅燕」とは「燕」のこと。戦国時代の燕は北京市の近くの「薊（けい）」にあった。

○「倭（国）」を称するのは「卑弥氏（貰彌辰沄氏）」である（65号（2））。

図3　黄河下流域の倭

（五）大凌河上流の「倭城」

卑弥氏は黄河下流域から倭城へ移る。

白狼水又東北逕昌黎縣故城西。地理志曰、交黎也。東部都尉治。（中略）高平川水注之。水出西北平川。東流逕倭城北。蓋倭地人徙之。　　『水経注』

（訳）白狼水はまた東北に流れ、昌黎縣の故城の西に至る。地理志に曰う、交黎なり。東部都尉治である。（中略）高平川の水はこれに注ぐ。水は西の北平川を出る。東流して倭城の北に至る。思うに倭地人がここに徙ったのであろう。

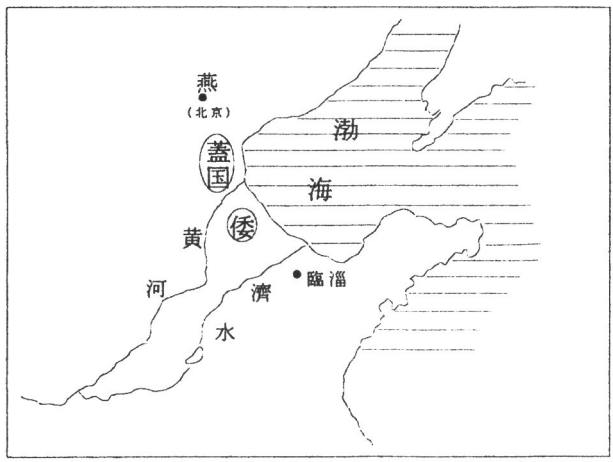


図3　倭と燕と黄河下流域

○「倭地人がここに徙ったのであろう」とある。「倭地人」とは黄河下流域の「倭（国）」であろう。「大凌河上流」に移り、「倭城」を樹立する。

■「倭」を称するのは「卑弥氏」

■「倭城」は「卑弥氏」の国

図4　大凌河上流の倭城

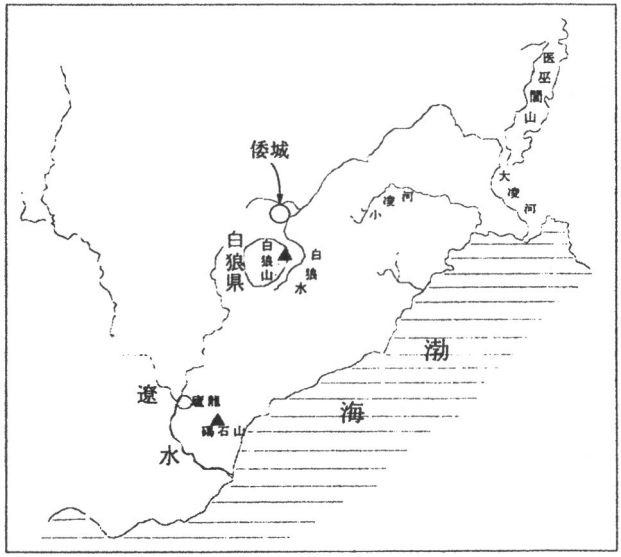


図４　白狼水と倭城（大凌河上流の倭城）

三　日本人の渡来ルート

（一）「天氏」と「卑弥氏」の渡来ルート（佃説）

「倭人」は黄河下流域付近から「二つの渡来ルート」に分かれる。

■「天氏」は「渤海沿岸渡来ルート」「天孫降臨」（図1）

■「卑弥氏」は「大凌河渡来ルート」「倭国、倭奴国」（図5）

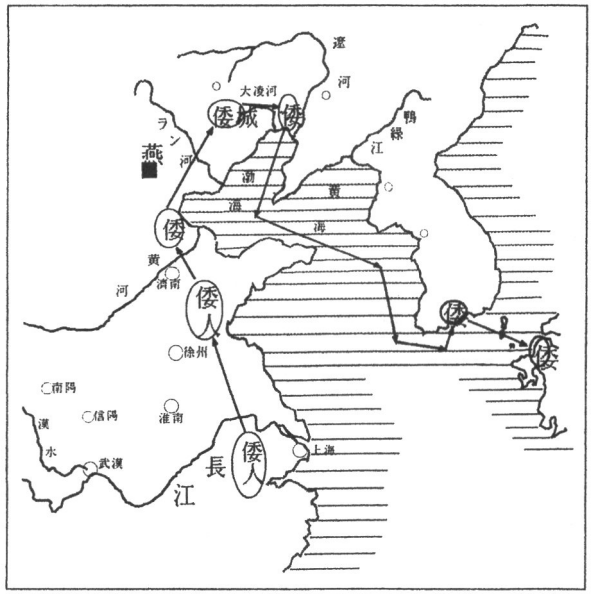


図５　卑弥氏の渡来ルート

（二）　DNAによる「アジア人の移動ルート」

「DNAの国際研究」（2009年12月11日付朝日新聞）

日本・中国・シンガポールなど10ヵ国・地域、90人以上の科学者の共同研究。アジア太平洋地域の約70民族・集団の約2千人を対象に約6万カ所のDNAの塩基配列を比較分析した。　（DNAの国際研究）

図6　日本人の祖先の渡来ルート（先史時代のアジアの人類集団の移動ルート）

図6　日本人の祖先の渡来ルート

○「二つの渡来ルート（佃説）」はDNAの研究により証明された。

四　中国東北地方の歴史（戦国時代～前漢時代）

（一）「秦・趙・燕」の長城

「燕」は長城を築き「五郡」を置く（図7）。

燕有賢将秦開。為質於胡、胡甚信之。帰而襲走東胡。東胡卻千余里。（中略）燕亦築長城。自造陽至襄平。置上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡。以拒胡。

『史記』匈奴列伝

（訳）燕に賢将秦開有り。胡に質となる。胡は甚だ秦開を信用する。ところが帰国すると東胡を襲う。東胡は千余里卻（しりぞ）く。（中略）燕亦長城を築く。造陽より襄平に至る。上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡を置く。以て胡を拒む。

「箕子朝鮮」の位置

燕東有朝鮮・遼東、北有林胡・楼煩、西有雲中・九原。

『史記』蘇秦列伝

（訳）燕の東に朝鮮と遼東があり、北には林胡と楼煩があり、西には雲中と九原がある。

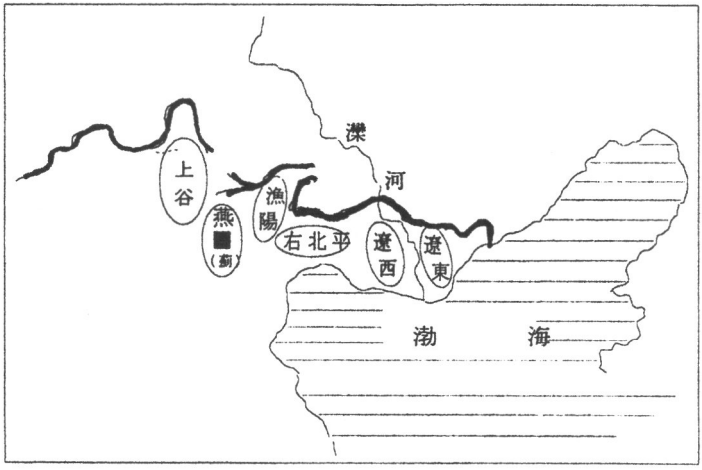


図7　万里の長城（燕の長城）と燕の五郡

○燕の東に「（箕子）朝鮮」がある。
○燕は長城を築いて「箕子朝鮮」の地を「遼東郡」にした。
■「遼水」＝濼河（らんが）。「遼水の東」が「遼東」
○「右北平郡」の北に「倭城」がある。「倭城」は「北平川」にある。

図7　燕の五郡

（二）秦の「万里の長城」

「紀元前222年」に始皇帝は中国を統一する。

■始皇帝は三国（秦・趙・燕）の長城を利用して「万里の長城」を築く。（図7）

■「万里の長城」は「起臨洮至遼東。延袤萬余里」（『史記』匈奴列伝）とある。

■「遼東郡在遼水東。始皇長城東至遼水」（『史記』蒙恬列伝）とある。

（注）従来の「万里の長城」の位置は誤り。「遼東」を「遼河の東」にしている。

（三）衛氏朝鮮

「衛氏朝鮮」の樹立

朝鮮王（衛）満者故燕人也。（中略）燕王盧綰反入匈奴。（衛）満亡命。聚黨千餘人、真結蛮夷服、而東走。出塞、渡浿水。（中略）稍、真番朝鮮・蛮夷及故燕・

斉亡命者王之、都王険。　『史記』朝鮮列伝

（訳）朝鮮王衛満は故（いにしえ）の燕人なり。（中略）燕王盧綰は漢に反（そむ）き匈奴に入る。衛満は亡命する。黨千餘人を聚め、髪を結い、蛮夷の服を着て、東へ走る。塞（長城）を出て、浿水を渡る。（中略）稍、真番朝鮮・蛮夷及故燕・斉の亡命者を支配し、之に王となり、王険に都す。

○「紀元前１９５年」に衛満は燕から亡命して「万里の長城」を出て、浿水を渡り、「王険」に都する。

■「前１９５年」、「衛氏朝鮮」の樹立。（図８）

図８　衛氏朝鮮の位置（渤海、浿水）

（四）　漢の「衛氏朝鮮」討伐

「紀元前１０８年」に漢は「衛氏朝鮮」を伐つ。

天子募罪人撃朝鮮。其秋、遣楼船将軍楊僕、従斉浮渤海。兵五萬人。左将軍荀彘出遼東、討右渠。

『史記』朝鮮列伝

（訳）天子（漢の武帝）は罪人を募り、（衛氏）朝鮮を撃つ。其秋、楼船将軍楊僕を遣わし、斉より渤海に浮く。兵五萬人。左将軍荀彘（じゅんてい）は遼東を出て、右渠（衛氏朝鮮王）を討つ。

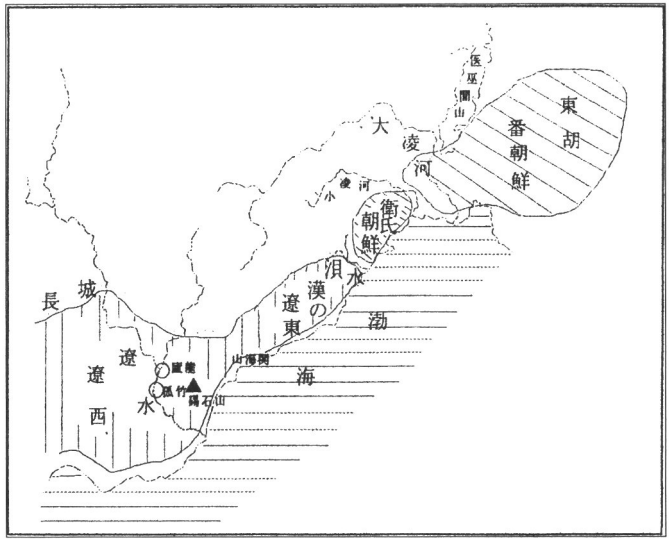


図８　前195年　衛氏朝鮮の位置

○「衛氏朝鮮」の位置の問題

■従来は、「衛氏朝鮮」の位置を朝鮮半島としている。（朝鮮半島は黄海）

■「渤海に浮く」とある。「衛氏朝鮮」は渤海沿岸にある。

■「万里の長城（塞）」は渤海沿岸にあることが分かる。

（五）漢の四郡設置

「前１０８年」に、漢は「衛氏朝鮮」を伐ち「四郡」を設置する。

■（元封三年）夏、朝鮮斬其王右渠降。曰其地為楽浪・臨屯・玄菟・真番郡。　『漢書』武帝紀

（訳）（前１０８年）夏、朝鮮は其の王右渠を斬り、降る。曰（以て）、其地を楽浪・臨屯・玄菟・真番郡と為す。

○楽浪郡は衛氏朝鮮の地に設置される。

○「楽浪郡」は渤海沿岸にある（図９）。

図９　漢の四郡（第１楽浪郡）

五　「卑弥氏」の渡来

（一）「倭城」からの逃亡

「前２２２年」に秦は中国を統一する。燕は秦に滅ぼされる。「倭城」は燕の支配下にあった。「倭城」から「卑弥氏」の一部は逃げて「大凌河」を下る。

（二）「天氏（安冕辰沄氏）」と「卑弥氏（貴彌辰沄氏）」の出会い

「天氏」は「卑弥氏」に国を譲る。

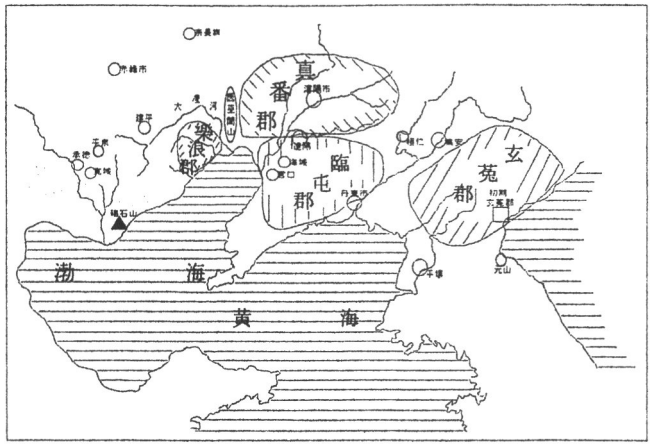


図９　四郡の位置（第１楽浪郡）

蓋辰者古国上代悠遠也。伝曰神祖之後、有辰沄謨率氏。

本與東表阿斯牟須氏為一。（中略）其最顕者為安冕辰汦氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。譲国於賁彌辰汦氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、撃退之。淮委氏、沃委氏竝列藩嶺東為辰守郭。潘耶又観兵亜府閭以掣漢。

『契丹古伝』

（訳）蓋し辰は古い国であり、上代より悠遠なり。伝えて曰く、神祖の後、辰汦謨率氏有り。本（もと）東表の阿斯牟須氏と同一なり。（中略）その最も顕著なる者が安冕辰汦氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰汦氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退す。淮委氏、沃委氏は並び連なり嶺東に藩（かきね）をつくり辰の守郭となる。潘耶は又亜府閭に兵を観せ、以て漢を掣（ひきとど）む。

（注記）『契丹古伝』とは中国の奉天（今の瀋陽市）のラマ教寺院にあった文書を写したもの。「題名」は無く日本人が付けたもの。

これまでの「まとめ」

○「天氏」は「殷と姻をなす」とある。「殷」は「箕子朝鮮」である。燕の東にある。「天氏」は「箕子朝鮮」と混血する。

○その後、渤海沿岸を通り、「大凌河下流域（医巫閭山の麓）」に来て建国する。

○「前２２２年」に秦の始皇帝は中国全土を統一する。

■「前２２０年」ころ、「卑弥氏」の一部は秦の支配を嫌い、逃げて大凌河を下る。

○「卑弥氏」は「天氏」から国を譲ってもらう。

■その直後に「漢が攻めて来た」とある。

■漢の樹立は「前２０６年」。

■衛満が燕から亡命して「衛氏朝鮮」を樹立するのは「前１９５年」。

■「漢」が攻めて来たのはこの間である。「前２００年」ころであろう。

○「前２００年」ころ、「天氏」は国を卑弥氏に譲り、朝鮮半島南部に「高天原」を建国する（前述）。

■「前１４０年」ころ「天氏」は北部九州に「天孫降臨」する（前述）。

（三）　卑弥氏の朝貢

「松野連系図」に「宇閉」が居る。

宇閉

漢の宣帝の時（地節二年）、遣使。　「松野連系図」

○「卑弥氏」の「宇閉」は「地節二年（紀元前68年）」

に漢へ朝貢している。

■「天氏」から国を譲ってもらった「大凌河下流域」からの朝貢であろう。

(四)「第2楽浪郡」

『漢書』地理志の「楽浪郡」

楽浪郡　縣二十五
朝鮮、（中略）増地、帯方、（中略）東浿、（後略）
『漢書』地理志

○「楽浪郡」に「帯方」がある。「204年」に公孫康は「帯方郡」を今の「ソウル」に設置する。「楽浪郡」は朝鮮半島にある。
その検証。『漢書』地理志の浿水

（浿）水西至増地入海　『漢書』地理志
（訳）浿水は西に流れて増地に至り、海に入る。

『漢書』では「浿水」は東から西へ流れて海に入る。「浿水」は朝鮮半島の川である。黄海に流れている。
図10　第2楽浪郡

○「紀元前50年」ころ、漢は中国東北地方の支配を強化する。

■「遼東郡」の支配領域を拡大する。今の「遼寧省」まで支配。（図10）

■「遼東郡」は「漢の領土」であり、漢が直接支配・統治する。

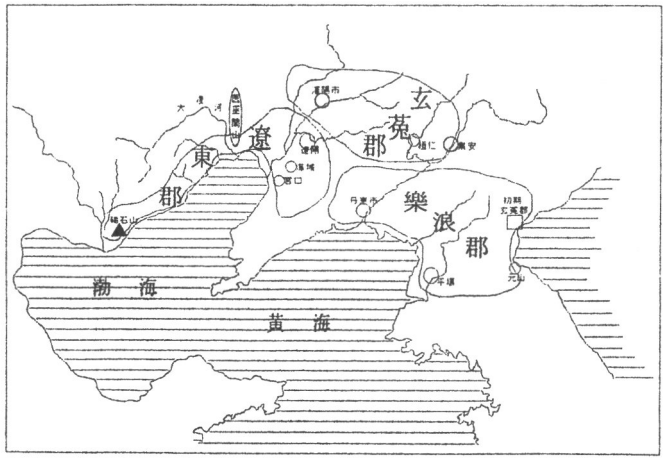


図10　拡大した遼東郡と第2楽浪郡

■「楽浪郡・玄菟郡」は「夷蛮の地」を支配・統治する。（第2楽浪郡）

（五）漢の「四郡設置」と「卑弥氏」（まとめ）

■「前108年」、漢は「衛氏朝鮮」を討ち、四郡を設置（前述）。

■「前68年」、卑弥氏の「宇閉」は漢へ朝貢（大凌河下流域から）。

■「前50年」ころ、漢は「遼東郡」を拡大する（領土の拡大）。

■「卑弥氏の国」は「遼東郡」の中に入る。（漢の領土になる）

■「卑弥氏」は漢の支配を嫌い、国を捨てて逃げる。

（六）倭国の建国（朝鮮半島南部）

○「前50年」ころ「倭国」を建国

■「前50年」ころ「卑弥氏」は漢の支配を嫌い、朝鮮半島南部へ逃げて「倭国」を建国。

韓在帯方之南。東西以海為限。南與倭接。

『三国志』韓伝

（訳）韓は帯方郡の南に在り、東西は海を以て限りと為す。南は倭と接す。

○「倭（国）」を称するのは「卑弥氏」である。

■「倭国」は「卑弥氏」の国である。

■「倭国」の中に「卑弥国」がある。「卑弥氏の国」。「倭国」の中心国。

○「倭国王帥升」の朝貢

安帝永初元年、倭国王帥升等献生口百六十人、願請見。

『後漢書』倭伝

（訳）安帝の永初元年（107年）、倭国王帥升等は生口百六十人を献じて、請見を願う。

■「倭国王帥升」は朝鮮半島南部の「倭国」の王であり、「卑弥氏」である。

○「倭国大乱」は朝鮮半島南部の「倭国」

桓霊之間、倭国大乱。

『後漢書』倭伝

（訳）桓帝と霊帝の間に、倭国は大いに乱れる。

■「桓霊」とは桓帝（147～167年）と霊帝（168～188年）のこと。

○「204年」まで「倭国」は「朝鮮半島南部」に在る。

桓霊之末、韓濊彊盛。郡縣不能制。（中略）建安中、公孫康分屯有縣以南荒地為帯方郡。（中略）興兵伐韓濊。是後倭韓遂属帯方。　『三国志』韓伝

（訳）桓帝・霊帝の末に、韓・濊は彊（つよ）く盛ん。郡や縣は制することができない。（中略）建安中、公孫康は屯有縣を分けて南の荒地を以て帯方郡と為す。（中略）兵を興し、韓・濊を伐つ。是後、倭と韓は遂に帯方郡に属す。

■「桓霊の末（１６０年、１８０年ころ）」に韓が倭を侵略する。「倭国乱れる」。
■「２０４年」に公孫度から「公孫康」に代わる。
■公孫康は「韓・濊」を伐つ。すると「倭と韓」が公孫氏に属したとある。
■「倭」は朝鮮半島にあることがわかる。

□「２０４年」以降まで「倭国」は朝鮮半島南部に在る。
■「倭国」は日本列島には存在しない（61号）。

六　弥生時代後期と倭奴国

（一）「弥生時代後期」の始まり　（紀元元年（０年）ころ）

「弥生時代の年表」（表１）
■弥生時代中期末　…　紀元元年（０年）ころ
■弥生時代後期初頭～後期前半　…　０年～50年ころ
■弥生時代後期後半～終末　…　50年ころ～２００年ころ

表１　弥生時代の年表
（『考古学研究』53―４（考古学研究会））

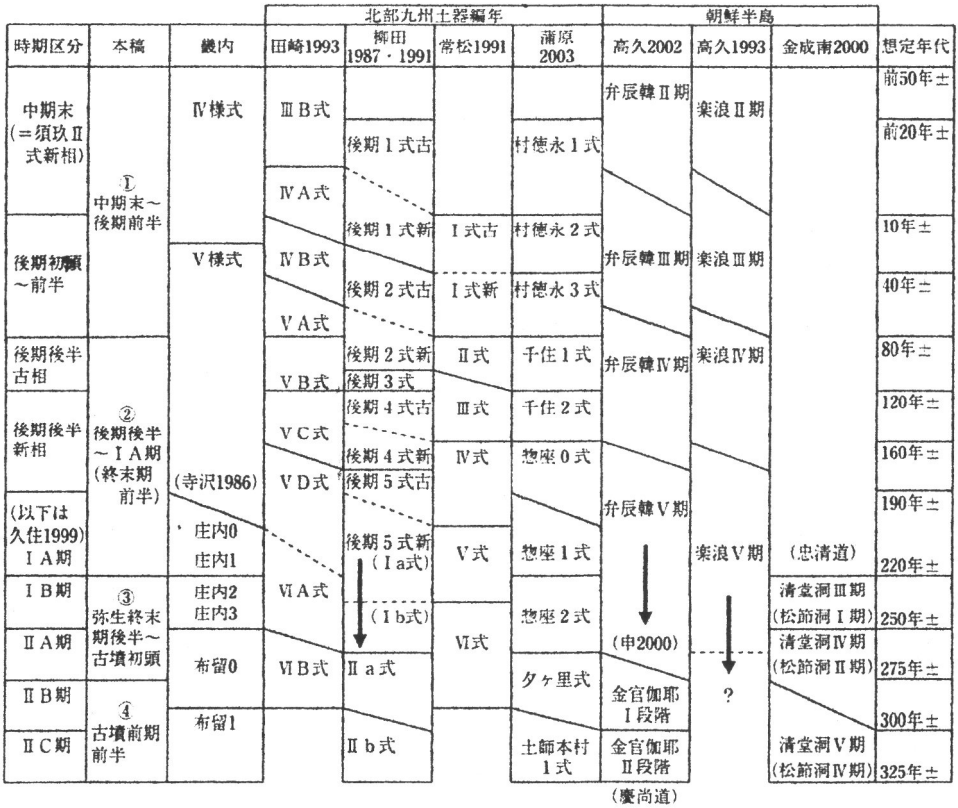
（二）福岡県春日市の「弥生時代後期」の遺跡

『須玖岡本遺跡』（吉川弘文館）によると春日市にある春日丘陵付近では、「弥生時代後期」になると中期とは様相が異なる。
○「弥生時代中期」の「春日丘陵」は「天孫降臨」した「天氏」の都であった。

（１）集落

■青銅器やガラス工房跡の存在が注目される春日丘陵北方の低地には、弥生時代後期の遺跡が広く分布する。ここでは竪穴住居跡の発見は少なく、掘立柱建物跡の群集が認められ、丘陵部の集落とは異なる。
■大南遺跡……須玖岡本遺跡の南方約１・２㎞の位置

表１　本稿で用いる弥生時代中期末～古墳時代前期前半の編年と併行関係（案）



周縁部に断面Ｖ字形の溝が巡るいわゆる環濠遺跡である。（中略）環濠の内部からは弥生時代中期～後期の１００軒以上におよぶ竪穴住居跡が著しく重複して検出され、このうちの九割以上は平面形が方形や長方形を呈した後期の住居跡が占めていた。環濠の上層からは後期の土器を主体として多数の遺物が出土しているが、最下層では中期の土器が発見されていることから、環濠が掘られたのは中期末前後の時期と推定される。

■大谷遺跡……須玖岡本遺跡の南端に位置
中期の住居跡が大半を占めていた。（中略）中期末あたりで集落がいったん途絶えたように見受けられ、このころ環濠が掘削されたと思われる大南遺跡との緊密な関係が指摘できる。

■駿河遺跡……春日丘陵の東方の低平な台地
後期の竪穴住居跡は平面形が長方形を呈するものが多く、いずれもベット状遺跡が付設されている。（中略）掘立柱建物跡は（中略）弥生時代後期に位置づけられる。（中略）特に鉄器やガラス小玉の出土数は際だっており、後期のほとんどの竪穴住居跡にともなっていた。『須玖岡本遺跡』（吉川弘文館）

（2）墳墓
春日丘陵では弥生時代前期の墳墓は極めて少ない。（中略）中期前葉以降になると春日丘陵とその周辺には、集落の急増にともない突如として墓地が各所に形成された。（中略）弥生時代中期に盛行した甕棺墓も、後期になるとまもなく激減し、春日丘陵とその周辺では集落の著しい縮小が認められないにもかかわらず、ほとんどの墓地で埋葬が途絶していく。後期には新たな墓地の出現もわずかにみられるが、とうてい途絶した墓地の数を補完しうるものではなく、明らかに墳墓数の激減がうかがえる。

■宮の下遺跡……春日丘陵の西部、須玖岡本遺跡の南方１・３㎞
甕棺墓の一部は土壙墓、石棺・石蓋土壙墓と重複し、なかには甕棺墓自体が破壊されたものもある。
『須玖岡本遺跡』（吉川弘文館）

□春日丘陵地域では弥生時代中期から後期にかけて、集落や墳墓に大きな変化がある。「王権」が交代している証拠である。
■「紀元０年」ころ、大量の渡来人が来ている。
■「弥生時代後期」が始まる。

（三）倭奴国の建国（博多湾沿岸）
○「57年」に「倭奴国」は後漢の光武帝より金印を賜る。

建武中元二年、倭奴国奉貢朝賀。使人自称大夫。倭国之極南界也。光武賜以印綬。　『後漢書』倭伝

（訳）建武中元二年（57年）、倭奴国は奉貢朝賀す。使人は自ら大夫を称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす。

○「57年」ころ、「倭奴国」の位置を「倭国」を使って説明している。

■「倭国」は「倭奴国」より先に存在していることがわかる。

■「松野連系図（卑弥氏）」に「中元二年に漢へ和通し、印綬を賜る。倭奴国王を称す」とある。

■「松野連系図」から「倭奴国」は「卑弥氏」であることがわかる。

■「倭」が付いていることからも言える。

○「倭奴国」の建国　（まとめ）

■「倭奴国」の「奴（ナ）」＝「那（ナ）」であろう。「博多」付近である。

■「紀元元年（0年）」ころ、「倭奴国」は博多湾沿岸に建国される。

■「57年」には光武帝から金印を賜る。

■朝鮮半島南部の「倭国」の一部が博多湾沿岸に来て「倭奴国」を建国したのであろう。

■春日市の「弥生時代後期」の遺跡は「倭奴国」である。

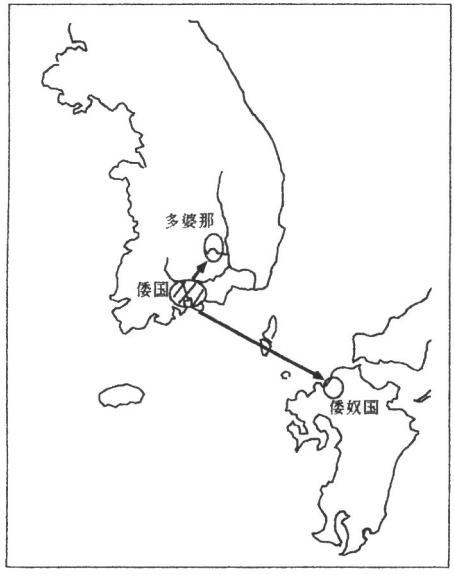


図11　倭国と倭奴国

図11　倭国と倭奴国

（四）「天氏」から「卑弥氏」へ交代

■春日市の「弥生時代中期」の遺跡（須玖岡本遺跡群）は「天孫降臨」した「天氏」の「都」である。

■「弥生時代後期」の初めに消滅する。

■「弥生時代後期」の「57年」に「倭奴国」は後漢王朝へ朝貢して金印を賜る。

■「卑弥氏」の「倭奴国」は「天孫降臨」した「天氏」の都（須玖岡本遺跡）を占領して博多湾沿岸一体を

支配する。「倭奴国王権」の樹立。
■博多湾沿岸の「王権」は「天氏」から「卑弥氏」に交代する。

七　二つの「奴国」

（一）『三国志』倭人伝の「奴国」（その1）

「奴国」は、伊都国から「東南至奴国。百里。（中略）有二萬餘戸」とある。
■「奴」＝「那」＝「博多湾沿岸」＝「天氏の都（須玖岡本遺跡）」。
■そこを「倭奴国」に追い出されて福岡市城南区・早良区・西区に移り、「奴国」になったのであろう。人口が「二萬餘戸」と多い。

（二）「遠絶」の「奴国」（その2）

■一部は「遠絶」の地へ移り、「奴国」になるのであろう。（表2）

表2　『三国志』韓伝・倭人伝

□「天氏の都（須玖岡本遺跡）」が「奴（那）国」になっていたのであろう。
■「奴国」は「倭奴国」に追い出されて「二つ」に分かれたのであろう。
■一つは「伊都国の東南」にある「奴国」、もう一つは「遠絶」にある「奴国」になる。

八　「不彌国」の建国

（一）三世紀の「伊都国王朝」

福岡市西区（吉武高木遺跡）に「天孫降臨」した「天氏（安冕辰沄氏）」は「弥生時代中期後半」に「福岡県前原市」へ移り、「伊都国」を建国する。
「対海国・一大国・末盧国・奴国・不彌国」を支配して「伊都国王朝」を樹立する。
図12　伊都国王朝

■伊都国は「卑奴母離」を派遣して統治する。
■「卑奴母離」＝「夷守（ヒナモリ）」＝「辺要の地を守る」。
■「ヒナモリ」は「日本語」。
■「天氏」は「日本語」である。
■「日本語」の故郷は中国の「呉地方」である。

（二）伊都国王朝の戸数

○「女王国より以北（伊都国王朝）」の国々には「里数」

○伊都国王朝

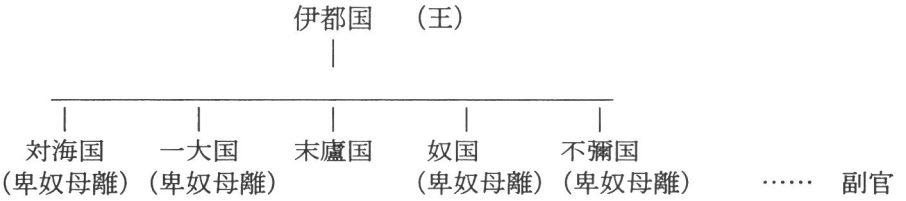


図12　伊都国王朝

と「戸数」が書かれている。（表2）

国名	里数	戸数
・対海国	千餘里	千餘戸
・一大国	千餘里	三千許家
・末盧国	千餘里	四千餘戸
・伊都国	五百里	千餘戸
・　奴国	百里	二萬餘戸
・不彌国	百里	千餘家

■「一大国」と「不彌国」は戸数が「家」になっている。

（三）朝鮮半島南部の「戸数」

○朝鮮半島南部ではすべて「家」である。（表2）

■凡五十餘国。大国萬餘家、小国数千家。
『三国志』韓伝

■弁辰韓合二十四国。大国四五千家、小国六七百家。
『三国志』弁辰伝

（四）『三国志』韓伝の「不彌国」

○『三国志』韓伝に「卑弥国」と「不彌国」がある。（表2）

■「韓国」の中に「卑弥国」がある。（『三国志』韓伝）

■「倭国」は「韓国」に侵略されて亡びる。「卑弥国」は「韓国」に吸収される。

■したがって『三国志』に「倭国伝」は無い。

○博多湾沿岸の「不彌国」は朝鮮半島南部の「不彌国」から一部の人々が渡来して建国したのであろう。
■戸数は「家」になっているから「不彌国」は「倭国（卑弥氏の国）」ではない。

（五）「不彌国」の成立時期

「弥生時代後期（０年～１９０年）」ころの博多湾沿岸地域には「倭奴国」が存在した。
ところが「三世紀」の「伊都国王朝」時代には「不彌国」が存在している。
○「２００年」ころに「倭奴国」から「不彌国」に交代している。
■「２０４年」に公孫康は「兵を興し、韓・濊を伐つ」。
■このとき朝鮮半島南部から逃げてきた人々は奈良県に「纒向遺跡」を形成する（土器＝庄内０式期）。（66号（２））
■「纒向遺跡」は「古墳時代のはじまり」という（寺澤薫氏）。
■年表では「弥生時代終末」。（表１）
■「２０４年」ころ、公孫康が「韓」を伐ったとき「不彌国」から逃げてきた人々が博多湾沿岸に「不彌国」を樹立したのであろう。
■不彌国の樹立は「２０４年」ころであろう。「纒向遺跡」と同時期。

（六）「不彌国」は「倭奴国」を追い出す

○「弥生時代後期（０年ころ～２００年ころ）」には博多湾沿岸に「倭奴国」が存在した。「57年」には後漢の光武帝から金印を授与される。
○ところが「弥生時代終末（２００年～２２５年）」には「不彌国」になっている。
■「不彌国」が「倭奴国」を追い出したのであろう。
■「倭奴国」は「筑紫野市隈」へ逃げる。
図13　伊都国・奴国・不彌国・倭奴国

九　卑弥呼の「倭国」

（一）「女王国（邪馬壹国）」の誕生

「２２０年～２３０年」ころ朝鮮半島の「旧倭国」の人々は公孫氏の侵略を受けて北部九州に逃げてくる。
○「福岡市南区～大野城市・筑紫野市・小郡市」に住み着く。
■「邪馬壹国」の誕生である。
■筑紫野市隈に在った「倭奴国」は「朝倉市」へ追いやられる。
■「倭奴国」は「狗奴国」になる。
■「其（邪馬壹国の）南有狗奴国」（倭人伝）。方位「23

○朝鮮半島南部から「旧倭国」の人々が逃げてきて「三国丘陵」に住み着いた。
○「津古遺跡」の地域が「邪馬壹国」の都である。
○「津古生掛古墳」は「卑弥呼の墓」である（60号）。

図14　伊都国・邪馬壹国・狗奴国の位置

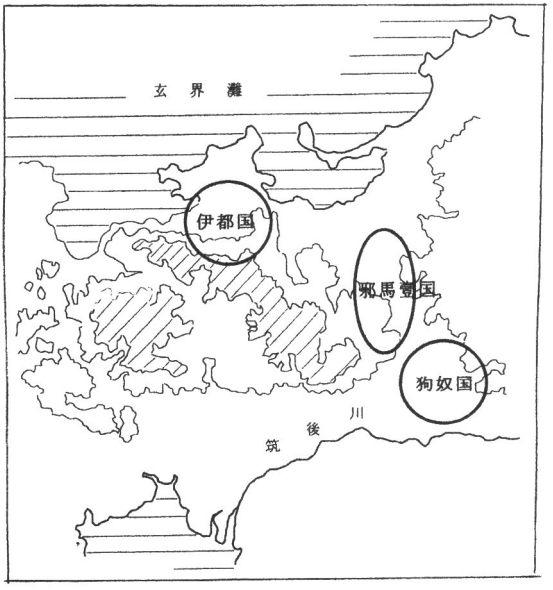


図14　伊都国・邪馬壹国・狗奴国の位置

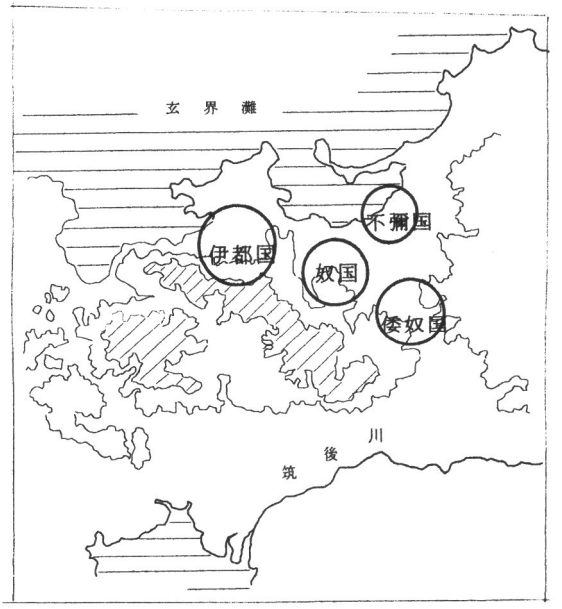


図13

度27分、北が西へ傾斜」（図14）（45号）

（二）　三国丘陵と「邪馬壹国」

「津古遺跡」について

弥生時代終末になると、宝珠川南岸の台地にある津古遺跡で集落が急速に発達する。必ずしも生産性が高くない三国丘陵で、（後略）

(三)　伊都国王朝と倭国の戦い

○「邪馬壹国」と「伊都国王朝」の戦いがはじまる。

其国本亦以男子為王。住七八十年、倭国乱。相攻伐歴年、乃共立一女子為王。名曰卑弥呼。『魏志』倭人伝

（訳）其の国は本（もと）亦男子を以て王と為す。とどまること七八十年、倭国乱れる。相攻伐歴年、乃ち一女子を共立して王と為す。名を卑弥呼という。

■「其の国」＝朝鮮半島南部の「倭国」

■「男子を以て王と為す」＝「倭国王帥升」

■「とどまること七、八十年」とは「１０７年の倭国王帥升の朝貢」から「70～80年後」＝「１８０年頃」＝「桓霊の末」の「倭国乱」である。

■「桓霊の末（１６０年、１８０年）」に韓国が強くなり、倭国を侵略した。「倭国は乱れる」。『後漢書』の「倭国大乱」は誤り（倭国内の争いではない）。

■「卑弥呼の共立」は「北部九州」である。

■したがって「相攻伐歴年」は「２３０年ころ～２３７年ころ」に「伊都国王朝」と戦ったことである。「１８０年」の「倭国乱」の時ではない。

(四)　卑弥呼の「倭国」の誕生

卑弥呼の国（女王国＝邪馬壹国）は伊都国王朝との戦いに勝利する。

■「景初二年（２３８年）」に魏へ朝貢して卑弥呼は「倭王」になる。

■日本列島に初めて「倭国」が誕生する。朝鮮半島の「倭国」の再興である。

■「卑弥呼」は「卑弥氏」であるから「倭国」を称する。

(五)　筑前型庄内甕の成立

「ⅠB期（弥生時代終末期後半＝２２０年～２５０年）」に比恵遺跡や博多遺跡群などの福岡平野の「中枢遺跡群」において、「筑前型庄内甕」が成立する。

『考古学研究』53―4（考古学研究会）

■「２０４年」ころ公孫氏の侵略を受けて朝鮮半島から逃げて来た人々は纒向に「庄内式土器」をもたらす（66号（2））。「庄内０式土器」

■「２２０年～２３０年」ころ朝鮮半島南部から福岡市に逃げてきた人々は「筑前型庄内甕」をもたらしたのであろう。

■「庄内式土器」の源流は「朝鮮半島南部」にあることがわかる。

■朝鮮半島南部の人々が日本列島に「庄内式土器」をもたらした。

・「２０４年」ころ「庄内０式土器」を「纒向遺跡」

に、
・「２２０年～２３０年」ころ「筑前型庄内甕」を「比恵・博多遺跡」に。

一〇　倭国と倭奴国の争い

（一）「倭国」と「倭奴国（狗奴国）」の戦い

「２４７年」ころ、狗奴国は卑弥呼の倭国と戦う。

其八年、倭女王卑弥呼與狗奴国男王卑弥弓呼素不和。遣倭載斯烏越等、詣郡説相攻撃状。『三国志』倭人伝
（訳）其八年（正始八年（２４７年））、倭の女王卑弥呼は狗奴国の男王卑弥弓呼と素より不和。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃の状を説明する。

■「素不和」とは、「狗奴国（倭奴国）」が「卑弥呼」によって朝倉市へ追いやられたからであろう。
■「倭奴国」を「狗奴国」にしたのは「卑弥呼」ではないだろうか。
■敵の「倭奴国」に「卑弥氏」の「倭」を使わせたくなかったのであろう。
■「魏王朝」は卑弥呼の言う通りに「倭奴国」を「狗奴国」にしているのであろう。

○「狗奴国の男王卑弥弓呼」とは
■「倭奴国」⇓「狗奴国（男王卑弥弓呼）」になっている。
■「卑弥呼」＝「卑弥氏で名を呼」という。「卑弥弓呼」＝「卑弥氏で名を弓呼」というのであろう。
■「倭国」と「狗奴国」の戦いは「卑弥氏」の同族争い。

一一　伊都国王朝と倭国の戦い

（一）「相誅殺」とは

「２４７年」ころ卑弥呼は狗奴国との戦いで戦死する。「男王」が立つ。

○「伊都国王朝」と「倭国」は再度戦う。
卑弥呼以死。（中略）更立男王、国中不服。更相誅殺。『三国志』
○「相誅殺」：互いに正当な王権であると主張して、相手に天誅を加える意。
■「伊都国」と「倭国」は互いに「正当な王権」であると主張した戦い。
■「天氏」と「卑弥氏」の戦いは「倭人同士」の戦い。
■「前２００年」には「天氏」は「卑弥氏」に国を譲っている。

（二）「神武東征」

○「倭国」は再び勝利する。
○敗れた「伊都国」は土地を捨てて東へ逃げる。「神武東征（逃亡）」（46号）。
■「神武東征」は「２５０年～２６５年」ころであろう。

○「伊都国王朝」の滅亡
■「倭国」との戦いに敗れた「天氏（伊都国王朝）」は北部九州から瀬戸内海沿岸、近畿地方（摂津・大和・伊勢志摩）へ逃げる。「天氏」は日本列島へ拡散。
■「天氏」の「日本語」が日本列島に波及する。
■「天氏」は今の「日本人」の基盤になっている。

一二　「熊襲（国）」の誕生　（まとめ）

○「２６６年」以降に、「狗奴国（倭奴国）」は倭国を追い出す
■「２４７年～２４８年」ころ、卑弥呼は狗奴国との戦いで戦死する。
■「２６６年」、壹與は晋へ朝貢する。その後「倭国」は消える。（卑弥呼の倭国は日本列島から消滅する）
■「四世紀」になると、北部九州は「熊襲」が占拠している。（『日本書紀』）
■「狗奴（クナ）国」が「熊（クマ）襲」になったのであろう。
■「狗奴国」は「倭国」を追い出して北部九州の土地を取り戻している。

○「熊襲（狗奴国）」は北部九州を支配する。
■「熊襲」は「狗奴国（倭奴国）」であるから「卑弥氏」である。（「松野連系図」と一致）

図15　熊襲の領域

■北部九州は「倭奴国（狗奴国＝熊襲＝卑弥氏）」が再び支配する。

図15　北部九州の熊襲

□これが「北部九州の古代史」である。

風寒夏則裸袒以尺布隱其前後以蔽形體其人不潔作溷在中央人圍其表居其弓長四尺力如弩矢用楛長尺八寸青石為鏃古之肅慎氏之國也善射射人皆入因矢施毒人中皆死出赤玉好貂今所謂挹婁貂是也自漢已來臣屬夫餘夫餘雖少所在山險鄰國人畏其弓矢卒不能服也其國便乘船寇盜鄰國患之東夷飲食類皆用俎豆唯挹婁不法俗最無綱紀也

濊傳

濊南與辰韓北與高句麗沃沮接東窮大海今朝鮮之東皆其地也戶二萬昔箕子既適朝鮮作八條之教以教之無門戶之閉而民不為盜其後四十餘世朝鮮侯淮僭號稱王陳勝等起天下叛秦燕齊趙民避地朝鮮數萬口燕人衛滿魋結夷服復來王之漢武帝伐滅朝鮮分其地為四郡自是之後胡漢稍別無大君長自漢已來其官有侯邑君三老統主下戶其耆舊自謂與句麗同種其人性原慤少嗜慾有廉恥不請句麗言語法俗大抵與句麗同衣服有異男女衣皆著曲領男子繫銀花廣數寸以為

飾自單單大山領以西屬樂浪自領以東七縣都尉主之皆以濊為民後省都尉封其渠帥為侯今不耐濊皆其種也漢末更屬句麗其俗重山川山川各有部分不得妄相涉入同姓不婚多已諱疾病死亡輒捐棄舊宅更作新居有麻布蠶桑作縣曉候星宿豫知年歲豐約不以珠玉為寶常用十月祭天晝夜飲酒歌舞名之為舞天又祭虎以為神其邑落相侵犯輒相罰責生口牛馬名之為責禍殺人者償死少寇盜作乎長三丈或數人共持之能步戰樂浪檀弓出其地其海出班魚皮土地饒文豹又出

果下馬漢桓時獻之（臣松之案果下馬高三尺乘之可以果下正謂下行故謂之果下見博物志）

始六年樂浪太守劉茂帶方太守弓遵以領東濊屬句麗興師伐之不耐侯等舉邑降其八年詣闕朝貢詔更拜不耐濊王居處雜在民間四時詣郡朝謁二郡有軍征賦調供給役使遇之如民

韓傳

韓在帶方之南東西以海為限南與倭接方可四千里有三種一曰馬韓二曰辰韓三曰弁韓辰韓者古之辰國也馬韓在西其民土著種植知蠶桑作縣布各有長帥大者自名為臣智其次為邑借

散在山海間無城郭有爰襄國牟水國桑外國小石索國大石索國優休牟涿國臣濆沽國伯濟國速盧不斯國日華國古誕者國古離國怒藍國月支國咨離牟盧國素謂乾國古爰國莫盧國卑離國占離卑國臣釁國支侵國狗盧國卑彌國監奚卑離國古蒲國致利鞠國冉路國兒林國駟盧國內卑離國感奚國萬盧國辟卑離國臼斯烏旦國一離國不彌國友半國狗素國捷盧國牟盧卑離國臣蘇塗國莫盧國古臘國臨素半國臣雲新國如來卑離國楚山塗卑離國一難國狗奚國不雲

國不斯濆邪國爰池國乾馬國楚離國凡五十餘國大國萬餘家小國數千家總十餘萬戶辰王治月支國臣智或加優呼臣雲遣支報安邪踧支濆臣離兒不例拘邪秦支廉之號其官有魏率善邑君歸義侯中郎將都尉伯長侯淮既僭號稱王為燕亡人衛滿所攻奪魏略曰昔箕子之後朝鮮侯見周衰燕自尊為王欲東略地朝鮮侯亦自稱為王欲興兵逆擊燕以尊周室其大夫禮諫之乃止使禮西說燕燕止之不攻後子孫稍驕虐燕乃遣將秦開攻其西方取地二千餘里至滿潘汗為界朝鮮遂弱及秦并天下使蒙恬築長城到遼東時朝鮮王否立畏秦襲之略服屬秦不肯朝會否死其子準立二十餘年而陳項起天下亂燕齊趨民愁苦稍稍亡往準準乃置之於西方及漢以盧綰為燕王朝鮮與燕界於溴水及綰反入匈奴燕人衛滿亡命為胡服東渡溴水詣準降說準求居西界故中國亡命為朝鮮

藩屏準信寵之拜為博士賜以圭封之百里令守西邊滿誘亡黨眾稍多乃詐遣人告準言漢兵十道至求入宿衛遂還攻準準與滿戰不敵也將其左右宮人走入海居韓地自號韓王魏略曰其子友親留在國者因冒姓韓氏準王海中不與朝鮮相往來其後絕滅今韓人猶有奉其祭祀者漢時屬樂浪郡四時朝謁魏略曰初右渠未破時朝鮮相歷谿卿以諫右渠不用東之辰國時民隨出居者二千餘戶亦與朝鮮貢蕃不相往來至王莽地皇時廉斯鑡為辰韓右渠帥聞樂浪土地美人民饒樂士欲來降出其邑落見田中驅雀男子一人其語非韓人問之男子曰我等漢人名戶來我等輩千五百人伐材木為韓所擊得皆斷髮為奴積三年矣鑡曰我當降漢樂浪汝欲去不戶來曰可辰鑡因將戶來來出詣含資縣縣言郡郡即以鑡為譯從岑中乘大船入辰韓逆取戶來降伴輩尚得千人其五百人已死鑡時曉謂辰韓汝還五百人若不者樂浪當遣萬兵乘船來擊汝辰韓曰五百人已死我當出贖直耳乃出辰韓萬五千人牟韓布萬五千匹鑡收取直還郡表鑡功義賜冠幘田宅子孫數世至安帝延光四年時故受復除柏靈

之末韓濊彊盛郡縣不能制民多流入韓國建安中公孫康分屯有縣以南荒地為帶方郡遣公孫模張敞等收集遺民興兵伐韓濊舊民稍出是後倭韓遂屬帶方景初中明帝密遣帶方太守劉昕樂浪太守鮮于嗣越海定二郡諸韓國臣智加賜邑君印綬其次與邑長其俗好衣幘下戶詣郡朝謁皆假衣幘自服印綬衣幘千有餘人部從事吳林以樂浪本統韓國分割辰韓八國以與樂浪吏譯轉有異同臣幘沾韓忿攻帶方郡崎離營時太守弓遵樂浪太守劉茂興兵伐之遵戰死二郡遂

韓

滅韓其俗少綱紀國邑雖有主帥邑落雜居不能
善相制御無跪拜之禮居處作草屋土室形如冢
其戶在上舉家共在中無長幼男女之別其葬有
棺無槨不知乘牛馬牛馬盡於送死以瓔珠爲財
寶或以綴衣爲飾或以縣頸垂耳不以金銀錦繡
爲珍其人性彊勇魁頭露紒如炅兵衣布袍足履
革蹻蹋其國中有所爲及官家使築城郭諸年少
勇健者皆鑿脊皮以大繩貫之又以丈許木鍤之
通日嚾呼作力不以爲痛既以勸作且以爲健常
以五月下種訖祭鬼神群聚歌舞飲酒晝夜無休

其舞數十人俱起相隨踏地低昂手足相應節奏
有似鐸舞十月農功畢亦復如之信鬼神國邑各
立一人主祭天神名之天君又諸國各有別邑名
之爲蘇塗立大木縣鈴鼓事鬼神諸亡逃至其中
皆不還之好作賊其立蘇塗之義有似浮屠而所
行善惡有異其北方近郡諸國差曉禮俗其遠處
直如囚徒奴婢相聚無他珍寶禽獸草木略與中
國同出大栗大如梨又出細尾雞其尾皆長五尺
餘其男子時時有文身又有州胡在馬韓之西海
中大鳥山上其人差短小言語不與韓同皆髡頭如

鮮卑但衣韋好養牛及豬其衣有上無下略如裸
勢乘船往來市買中韓

辰韓傳

辰韓在馬韓之東其耆老傳世自言古之亡人避
秦役來適韓國馬韓割其東界地與之有城柵其
言語不與馬韓同名國爲邦弓爲弧賊爲寇行酒
爲行觴相呼皆爲徒有似秦人非但燕齊之名物
也名樂浪人爲阿殘東方人名我爲阿謂樂浪人
本其殘餘人今有名之爲秦韓者始有六國稍分
爲十二國

弁辰傳

弁辰亦十二國又有諸小別邑各有渠帥大者名
臣智其次有險側次有樊濊次有殺奚次有邑借
有已柢國不斯國弁辰彌離彌凍國弁辰接塗國
勤耆國難彌離彌凍國弁辰古資彌凍國弁辰古
淳是國冉奚國弁辰半路國弁樂奴國軍彌國弁
軍彌國弁辰彌烏邪馬國如湛國弁辰甘路國戶
路國州鮮國馬延國弁辰狗邪國弁辰走漕馬國
弁辰安邪國馬延國弁辰瀆盧國斯盧國優中國
弁辰韓合二十四國大國四五千家小國六七百

家總四五萬户其十二國屬辰王辰王常用馬韓人作之世世相繼辰王不得自立爲王（魏略曰明其爲流移之人故以爲名馬韓所制）土地肥美宜種五穀及稻曉蠶桑作縑布乘駕牛馬嫁娶禮俗男女有別以大鳥羽送死其意欲使死者飛揚（魏略曰其國作屋模累木爲之有似牢獄也）國出鐵韓濊倭皆從取之諸市買皆用鐵如中國用錢又以供給二郡俗喜歌舞飲酒有瑟其形似筑彈之亦有音曲兒生便以石厭其頭欲其褊今辰韓人皆褊頭男女近倭亦文身使步戰兵仗與馬韓同其俗行者相逢皆住讓路

弁辰傳

弁辰與辰韓雜居亦有城郭衣服居處與辰韓同言語法俗相似祠祭鬼神有異施竈皆在戶西其瀆盧國與倭接界十二國亦有王其人形皆大衣服絜清長髮亦作廣幅細布法俗特嚴峻

倭人傳

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對海國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絶島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘户無良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘里至末盧國有四千餘户濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鰒水無深淺皆沈沒取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千餘户世有王皆統屬女王國郡使往來

常所駐東南至奴國百里官曰兕馬觚副曰卑奴母離有二萬餘户東行至不彌國百里官曰多模副曰卑奴母離有千餘家南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘户南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳鞮可七萬餘户自女王國以北其户數道里可得略載其餘旁國遠絶不可得詳次有斯馬國次有已百支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有好古都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國

次有蘇奴國次有呼邑國次有華奴蘇奴國次有鬼國次有為吾國次有鬼奴國次有邪馬國次有躬臣國次有巴利國次有支惟國次有烏奴國次有奴國此女王境界所盡其南有狗奴國男子為王其官有狗古智卑狗不屬女王自郡至女王國萬二千餘里男子無大小皆黥面文身自古以來其使詣中國皆自稱大夫夏后少康之子封於會稽斷髮文身以避蛟龍之害今倭水人好沈沒捕魚蛤文身亦以厭大魚水禽後稍以為飾諸國文身各異或左或右或大或小尊卑有差計其道里

當在會稽東治之東其風俗不淫男子皆露紒以木緜招頭其衣橫幅但結束相連略無縫婦人被髮屈紒作衣如單被穿其中央貫頭衣之種木稻紵麻蠶桑緝績出細紵縑緜其地無牛馬虎豹羊鵲兵用矛楯木弓木弓短下長上竹箭或鐵鏃或骨鏃所有無與儋耳朱崖同倭地溫暖冬夏食生菜皆徒跣有屋室父母兄弟臥息異處以朱丹塗其身體如中國用粉也食飲用籩豆手食其死有棺無槨封土作冢始死停喪十餘日當時不食肉喪主哭泣他人就歌舞飲酒已葬舉家詣水中澡

浴以如練沐其行來渡海詣中國恒使一人不梳頭不去蟣蝨衣服垢汚不食肉不近婦人如喪人名之為持衰若行者吉善共顧其生口財物若有疾病遭暴害便欲殺之謂其持衰不謹出真珠青玉其山有丹其木有柟杼豫章楺櫪投橿烏號楓香其竹篠簳桃支有薑橘椒蘘荷不知以為滋味有獼猴黑雉其俗舉事行來有所云為輒灼骨而卜以占吉凶先告所卜其辭如今龜法視火坼占兆其會同坐起父子男女無別人性嗜酒（魏略曰其俗不知正歲四節但計春耕秋收以為年紀）見大人所敬但搏手以當跪拜其

人壽考或百年或八九十年其俗國大人皆四五婦下戶或二三婦婦人不淫不妒忌不盜竊少諍訟其犯法輕者沒其妻子重者沒其門戶及宗族尊卑各有差序足相臣服收租賦有邸閣國國有市交易有無使大倭監之自女王國以北特置一大率檢察諸國畏憚之常治伊都國於國中有如刺史王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王不得差錯下戶與大人相逢道路逡巡入草傳辭說事或蹲或跪兩手據地為之恭敬對應聲曰噫比如然諾

倭人

其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歷年乃共立一女子爲王名曰卑彌呼事鬼道能惑衆年已長大無夫壻有男弟佐治國自爲王以來少有見者以婢千人自侍唯有男子一人給飲食傳辭出入居處宮室樓觀城柵嚴設常有人持兵守衛女王國東渡海千餘里復有國皆倭種又有侏儒國在其南人長三四尺去女王四千餘里又有裸國黑齒國復在其東南船行一年可至參問倭地絶在海中洲島之上或絶或連周旋可五千餘里景初二年六月倭女王遣大夫難升米

魏志三十　廿九

等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男生口四人女生口六人班布二匹二丈以到汝所在踰遠乃遣使貢獻是汝之忠孝我甚哀汝今以汝爲親魏倭王假金印紫綬裝封付帶方太守假授汝其綏撫種人勉爲孝順汝來使難升米牛利涉遠道路勤勞今以難升米爲率善中郎將牛利爲率善校尉假銀印青綬引見勞賜遣還今以絳地交龍錦五匹臣松之以爲地

倭人

應爲絳漢文帝著皁衣謂之弋綈是也此字不體非魏朝之失則傳寫者誤也絳地縐粟罽十張倩絳五十匹紺青五十匹荅汝所獻貢直又特賜汝紺地句文錦三匹細班華罽五張白絹五十匹金八兩五尺刀二口銅鏡百枚真珠鉛丹各五十斤皆裝封付難升米牛利還到錄受悉可以示汝國中人使知國家哀汝故鄭重賜汝好物也正始元年太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國拜假倭王并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物倭王因使上表荅謝詔恩其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青

魏志三十　三十

縑緜衣帛布丹木拊短弓矢掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬其六年詔賜倭難升米黃幢付郡假授其八年太守王頎到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡說相攻擊狀遣塞曹掾史張政等因齎詔書黃幢拜假難升米爲檄告喻之卑彌呼以死大作冢徑百餘步徇葬者奴婢百餘人更立男王國中不服更相誅殺當時殺千餘人復立卑彌呼宗女壹與年十三爲王國中遂定政等以檄告喻壹與壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等

還因詣臺獻上男女生口三十人貢白珠五千孔
青大句珠二枝異文雜錦二十匹
評曰史漢著朝鮮兩越東京撰録西羌魏世匈奴
遂衰更有烏丸鮮卑麥及東夷使譯時通記述隨
事豈常也哉魏略曰西戎傳曰氐人有王所從來久矣
自漢興益州置武都郡以其種人分散山
谷間或在福禄或在汧隴左右其種非一稱號不一後或號
青氐或號白氐或號蚺氐此蓋其之類而異中國人即其服
色而名之也其自相號曰盍稚各有王侯多受中國封拜近
者數百里遠者數十里布在汧隴之西漢興以來稍自彊大
至王莽天鳳中其王阿貴白項氏王千餘落各有邑聚至
十六年從馬超爲龐德超破之後阿貴爲侯渾所攻滅千萬
餘落皆降國家分徙其前後兩端者置
扶風美陽今之安夷槐里二部護軍所典是也其太守善分
離天水南安界今之隴平襄二郡所守是也其俗語不與中國
同及羌雜胡同各自有姓姓如中國之姓矣其衣服尚青絳
飲能織布善田種畜養家牛馬騾驢其婚人嫁娉著衽露其

縫裳之制有似羌胡言語多知中國語由
與中國錯居故也其自還種落間則自以語言有異於
羌此蓋乃昔所謂西戎在於衍邑源道者也今雖都統於郡
國然故自有王侯在其底落間又故武都地陰平街左右小
有萬餘落貧富本甸數也甸數名數輒爲貧始建武時甸數
衆分去其數輒亡遷在金城武威酒泉北黑水西河東西畜
牧逐水草抄盜涼州部落稍多有數萬不與東部鮮卑同
也其種非一有大胡有丁令或頗有羌雜處山由本亡數輒故
也當漢獨之際其大人有禮拓死後其枝大人南近在窟羅
今居界有禿髮鬼歸來數反爲涼州所殺今有勃提或降來或遁
去常爲西州道路患也歲煌西域之南山中從鄯善西至
蔥嶺數千里南有月氏餘種蔥嶺河源出焉東北流與白馬
黃牛羌各有種類孕身六月生南與白馬羌鄰西域諸國漢初開其道時有三十六後
分爲五十餘從建武已來更相吞滅今有二十國從玉門關西出經鄯善
玉門關入有二道從玉門關西出發都
轉西越葱嶺經縣度入大月氏爲道從玉門關西出發都
護井回高昌壁沙北頭經居盧倉從沙西井轉西北過龍堆到
故樓蘭轉西詣龜茲至葱嶺西北出蔥嶺河流經三隴沙及龍堆出五船北到車師界戊己校尉所治高

昌轉西與中道合龜茲爲新道九西域所出有前史已具詳
今故略說南道西行且走國小宛國精絕國樓蘭國皆幷屬
鄯善也戎盧國扜彌國渠勒國皇仁國皆幷屬于闐國
大夏國高附國天竺國皆幷屬大月氏　臨兒國浮屠邊北
其國王生浮屠浮屠太子也父曰屑頭邪母太莫邪浮屠身
服色黃髮青眼鼻如胡狄喉有結墮迦能行七步此國在天竺城中
天竺又有神人名沙律昔漢哀帝元壽元年博士弟子景盧
受大月氏王使伊存口受浮屠經曰復立者其人也浮屠所
戒勑專精志道清塞欲門柏閑疏門白誠閑此立最門者其人也浮屠
之天竺數胡浮屠屬弟子別號白有二十九不能詳載故略
之如此　車離國一名乾特一名沛隸王在天竺東南三
千餘里其地平暑濕田種稻有別城數十人民性
弱月氏天竺擊服之其地東西南北數千里人民男女皆長
一丈八尺乘象駕駱以戰今月氏役統之整越國一名漢越
人賈似至焉南道而西極轉東南盡矣中道西行嗣絜國危
須國山王國皆幷屬焉者姑墨國溫宿國尉頭國皆幷屬龜
茲也捐中國珍寶重譯而來欲與中國貿市

優若國諭令國指毒國休循國琴國皆幷屬疏勒自是以西
大宛安息條支烏弋一名排特此四國去洛四本國也無
考援前世譯以爲條支在太秦西今其實在東前世又譯以
爲罽賓安息今更役屬之號爲安息西界前世又譯以爲弱
水在條支西今弱水在大秦西前世又譯以爲從條支西行
二百餘日近日所入今從大秦國一號犁
軒在安息條支西大海之西從安息界安谷城乘船渡海
西與國益一國無風或三歲其國在海西故
谷謂之海西有河出其國西又有大海海西有濕散城從國
下直北至烏丹城西南又度一河乘船一日乃過西南又渡
一河乘船一日乃過凡有大都三河之間其人小與安谷同俗
比復直西行之海西復直南行經之烏弋散城渡一河乘船
一日乃過周回繞海凡當渡大海六日乃到其國有小城
邑合四百餘東西南北數千里其地沿海以石爲城
郭其土地有稻麥糜稻桑蠶梓竹箭漆樹胡桐石蜜白鹽
黃鹽烏弋山離國在烏弋東南百餘里其俗與烏弋同
土地平樂有大鳥卵如甕盛水得飲數百人
一云大如瓮盛水得飲二斛
其人善眩人或截斷其頭或解其手足還復如故
又自縛投地轉出其頭數丈乃還復合坐上先
有酒肴飯食自然滿前其俗以此爲常
條支國臨大海土地暑溼耕田出稻大鳥卵如瓮
人民乘之以渡海往來日中行海水日西沒
沒者水精日入處也
大秦國一名犁鞬在條支西海西大秦人質直
其人民皆修長大平正有似中國人而不相
往來國出珊瑚琥珀琉璃金銀奇寶明珠大貝車渠
瑪瑙珊瑚樹琅玕珠赤白黑青黃綠紫金縷罽織成
金縷罽刺繡文繒雜色綾金縷繡雜色綾絳緋
紺青緅紫絞紫羅縠雜色縠輕重錦雜色錦
白疊布好細白氈五色毾㲪金銀釦器剛
畫琉璃大秦道里最遠人民希至其國王
常欲通使於中國而安息圖其利

参考文献

・『須玖岡本遺跡』（吉川弘文館）
・『考古学研究』53―4（考古学研究会）
　久住猛雄「博多湾貿易」の成立と解体
・『考古学・人類学・言語学との対話』（岩波書店）
・（「ｘｘ号（ｎ）」）…「古代文化を考える」ｘｘ号の佃論文のｎ番目
　（すべてホームページに公開）

○ホームページ
・tsukudaosamu.com